

ビオトープにおける学びと表現 I

○高梨 智子 榎 英子 當銀 玲子
(浦安市立堀江幼稚園) (清和大学短期大学部) (浦安市立明海幼稚園)

はじめに

園庭は、幼児が全身で環境にかかわり、多様な経験を通して発達を遂げていく重要な保育環境である。これまで、園庭環境を豊かにする様々な試みを行い、保育者と研究者との協同による実践報告を行ってきた。

近年、園庭にビオトープをつくる実践が数多く報告されている。ビオトープの設置は、幼児が自然とのかわりを深める好機となり、そこでの直接体験を通して、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われると考えられる。本論では、完成されたビオトープではなく、つくる過程における幼児の表現と学びの可能性に着目して展開した多様な実践を報告する。

方法と経過

1) ビオトープの設置と改修の経過

ビオトープの改修に至る経過は以下の通りである。花壇の改造による田んぼ作り／2000 年 5 月に園庭の自然環境を多様化し豊かにする目的で、4 箇所ある花壇のうち 2 箇所を田んぼにする試みを行った。すると、穴を掘る時には、植物の根や球根、虫や貝殻等出会った物や作り上げた場でイメージを広げて遊ぶ姿が見られ、作る過程で豊かな体験をすることができた。また、田んぼができてからはカエルの鳴き声や稲の葉音を聞く、ヤゴに気づく、自然に張った氷で遊ぶという体験ができ、水辺のある環境が幼児の感性を豊かにし、学びと表現が生まれる源となることが理解された。

ビオトープ作り／2002 年 5 月から、年長組園児と共に園庭の一角に「みんなの池」を作ることを試みた。穴を掘る過程で、深さによって土の色や質が変わることや、シートを敷かずにとめた水が土にしみ込んでしまう現象に出会った。これらの様々な発見は、幼児の五感に結びついた、確かな手ごたえを伴った驚きや疑問を生み出した。幼児が全身で環境にかかわる時、実感することで生まれる幼児の豊かな言葉（ささやき）を聞くことが出来た。

ビオトープの改修／昨年作った池にかかわる子どもたちの様子を見てみると、昨年度の幼児との気質の違いもあったが、かわりが希薄であったり、乱暴であったりと、池への愛着が感じられなかった。それは、「自分たちの池」という実感がもてないからではないかと考え、2003 年 10 月より池の改修に取り組んだ。

2) 本実践のねらいと内容

池を、今在園している子どもたちにとって豊かな環境とするためには、昨年作った池への要望(不満)、自分たちは池でどんなことがしたいか、どんな池を作ってみたいかという思いを、十分表すことが大切だと考え、多様な媒体を用いた表現の機会を設定した。

改修作業を、参加する幼児の表現と学びの機会とするために、以下のような保育の可能性を考え、ねらいを設定し、生活の流れに配慮して実践を行った。

池の改修作業	学	身体知:穴を掘る・土を運ぶ・道具を扱う・凸凹地形
	び	好奇心:土の中・水や土の性質・生物に関心をもつ
	表	感情:発見の驚き・協同と完成の喜びを味わう
	現	イメージ:自分の考えをもつ・伝え合う・ひろげる 媒体:言語、描画、粘土、積木、多様な材料で表す

結果と考察

1) 実践1「どんな池にしたい?」

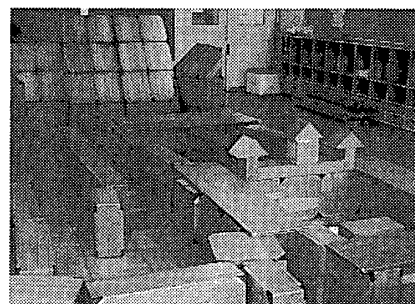
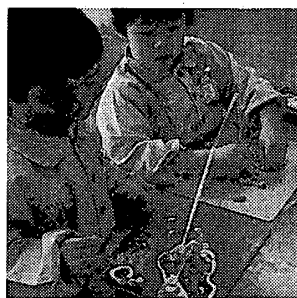
経過／10 月 7 日、学年合同で集まり、「どんな池を作りたいか」「池でどんなことをして遊びたいか」について話し合う。一人の教師が問いかけ、思いや考えを引き出し、もう一人の教師が、子どもたちから出た意見を Web 図で模造紙に書きまとめた。

結果／「魚をいっぱいにしたい」「水の中に入って遊びたい」「平らな石を敷いて、池を眺めるところを作ろうよ」「ハートの形がいい」などの意見があがった。

考察／普段から池にかかわっている幼児からは、具体的なイメージが出てきたが、かわりの少ない幼児からは、池の形に関するものや実現の難しいものが多かった。これらの回答から、身近に池のない環境で育ってきた幼児の池に対するイメージは、限界があると感じた。実際に、身体を動かし池を改修していく過程で思いが膨らんでいくのではないかと考えた。

2) 実践2「粘土で作ってみよう」

経過／10 月 23 日：元の池の水を抜き、植物や石、土を取り除き、大きな穴の状態まで進んだところで、粘土を使って、自己のイメージした池を表現する活動に取り組んだ。10 月 24 日：昨日は粘土だけを使って表現したが、2 日目は、素材として「楊枝」を提示し、どのように使えるか問いかけ、数人のアイディアを提示したあと製作に入った。



結果／四角や楕円で池の形を表し、その中に魚を飼う場所を作ったり、飛び石を置いたりするアイデアがでた。描画に抵抗感をもっている幼児も、積極的に取り組む様子が見られた。中には、粘土板一枚の表現では足らずに、2案3案と画用紙に描き始める幼児もいた。作品を通して、教師との対話や友達同士との会話から、一層思いが膨らみ、表現が豊かになっていった。翌日の活動では、楊枝を橋や池の柵、ボートのオールなどとして活用していた。楊枝という素材に惹かれ、そのものを使う楽しみを始める幼児もいた。

考察／可塑性のある粘土は、描画の苦手な幼児にとっても、何度でも修正することが出来ることで、思いを表現する楽しさを知る(味わう)ことができたと考える。また、粘土での表現を楽しむ過程で、幼児が自分と会話しながら池のイメージを膨らませる姿は、まさに言語(言葉)を身につけていく学びの姿であると考えられる。

3) 実践3「大型積み木で表現してみよう」

行事のためにしばらく作業が進んでいなかったのを、改めて、池のイメージを粘土や大型積み木で表現してみようとなげかけた。粘土には、池のイメージにつながればと、『砂利』と『ストロー』『竹串』を新たに提示した。どちらで表現するかは、幼児に選択させた。

結果／28名中、22人の幼児が粘土を選び、残りの6人が大型積み木を選んだ。粘土での表現では、曲がるストローを噴水や橋などとして使っていた。砂利は、池の中に敷いたり、池の縁に使う幼児が多かった。ストローは、活動時間が長くなるにつれ、友達と高さを競い合う道具にかわっていった。

大型積み木のグループは、まず、池の長さを「6人分だから、ちょうど(の人数)だね。」と6人が手をつないで測り、積み木を並べていた。また、画用紙に絵を描き、描いては作り、作っては描きという作業を繰り返して、6人が、互いに確認し合いながら進めていた。

考察／ストローから「噴水」をイメージした幼児の姿からは、与える素材が幼児の発想や想像力を膨らます要因となったことが読み取れる。また、粘土に、楊枝を提示した時と同様、「ものにひかれる」幼児の多いこ

とがわかった。

池の円周や縦と横の長さを、幼児同士で手をつなぎ、何人分であるかと測定した経験が生かされていた。自分たちの身体で測るという、任意単位がいくつあるかという数量の学びが見られた。さらに、設計図と積み木とを行き来しながら活動する姿からは、平面と立体とをつき合わせ認知するという学びの姿が見られた。

4) 事例1「TY男の変容」

TY男は、自分の遊びに没頭することが多く、人とかかわって遊ぶことがほとんどない幼児だった。

そのTY男が池の土運びには積極的に取り組んだ。トロッコに土を乗せると「僕は、1号車ね。いってきまーす。〇〇くんのは2号車だからねー。」と、土置き場と、池とを何度も往復した。翌日も、教師が一日の予定を伝えると「駄目だよ。僕には、やらなきゃいけない仕事があるんだから困る」と答えるほどだった。身体を動かすことも少なかった幼児だったが、作業の中で、どうしたら土が入った重いトロッコを上手く操作できるかなど試行錯誤する姿が見られた。土止めの板を作る釘打ちの作業では、かなづちを「順番ね」と友達と交互に使うなど、今までは見られなかった人とかかわりが見られるようになった。

TY男の変容からは、知的な活動だけでなく作業するという身体を使った『体験』が、TY男の池への思い(「仕事があるんだ」)を、そして、人とかかわる姿を引き出した。体験し、実感することで思いが引き出され、言葉が生まれるということがわかった。

5) まとめ

本実践から、幼児は表現することで学び、学ぶことで表現を豊かにしていくことが理解された。また、保育者の予想をこえた多様な表現と活動が見られた。

課題

今回は、池の改修という作業段階で、自己のイメージを表現する活動の中から得られた幼児の表現についての成果が主である。今後は、池作りに取り組むという体験を通して幼児が得ていく学び、出来上がった池を通して獲得していく表現や学びについて探っていきたい。